中学校

平成13年度

教育研究員研究報告書

国　　語

東京都教職員研修センター

平成13年度

教育研究員名簿（国語）

	区市町村	学校名	氏名
1班（文字言語班）	中央区	銀座中学校	荒井友香
	大田区	大森第四中学校	小栗一弘
	豊島区	道和中学校	福士由美子
	葛飾区	小松中学校	橋本恵子
	青梅市	吹上中学校	井口千恵子
	東久留米市	久留米中学校	○ 市川順康
2班（音声言語班）	世田谷区	烏山中学校	○ 大倉清子
	練馬区	大泉第二中学校	津久井まゆみ
	足立区	渕江中学校	◎ 小林秀一郎
	江戸川区	東葛西中学校	吉田孝子
	国分寺市	第一中学校	高瀬浩二
	多摩市	落合中学校	門馬弘

◎ 世話人　　○ 副世話人

担当　東京都教職員研修センター　　指導主事　新飯田潤一

目　　次

Ⅰ　研究主題設定の理由……2

Ⅱ　研究の構想

1　基本的な考え方……3

2　研究の方法……4

Ⅲ　研究の内容

1　1　班

(1)　ねらい……5

(2)　指導の実際……6

(3)　まとめ……13

2　2　班

(1)　ねらい……14

(2)　指導の実際……15

(3)　まとめ……23

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題……24

研究主題

目的に応じて適切に伝え合う力を高める指導法の工夫

Ⅰ　研究主題設定の理由

科学技術の目覚ましい進歩に伴って、「ＩＴ革命」が進み、様々な情報が氾濫する現代社会。望むと望まざるとにかかわらず、一方的に発信されてくる膨大な情報量。核家族化や少子化、パソコンやコンピュータゲーム等の普及、携帯電話によるメールのやりとりの流行。こういった社会環境の中で、子どもたちの活字離れやコミュニケーション不足が進み、上手に人間関係が作れずにいる。教育現場では、子どもたちが、膨大な情報から必要な情報を選択しきれず戸惑う姿や「ことば」を知らない、「ことば」を知っていても使い方を知らない子どもたちによる、誤解が元になったトラブルも多く見られる。

そのような中で、いよいよ、平成１４年度から新学習指導要領の下での教育が始まる。国語科は、「基礎・基本」の育成を本旨とした内容になっている。「国語科のあり方」という視点から考えてみると「国語科の基礎・基本」とは、どのようなものなのか。まず、新学習指導要領の国語科の目標を確認してみると「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」とある。

この目標には、「Ａ　話すこと・聞くこと」「Ｂ　書くこと」「Ｃ　読むこと」の３領域が簡潔に盛り込まれているが、大きく二つに分けられると考える。一つは、直接的に目標を立てて育成すべき言語能力である。これは、自分の考えを的確に相手に伝え、相手の考えを確実に理解できるようにして、対立点や問題点などを話し合いによって解決しようとする能力の育成である。もう一つは、国語科がこれまでも果たしてきた長期的な人間形成への貢献である。これは、日々の充実した言語生活の中で継続的に養われるべきものであり、また、国語を尊重する態度は生涯を通して追求すべき課題である。

従って、それらの基盤となる国語の授業においては、より一層の工夫を施し、充実を図っていかなければならない。

特に前者は、日本社会が現実的に求めているものであり、ここ数年間この目標を前提に「伝え合う力」を高める指導法が研究されてきている。「伝え合う力」とは、適切に表現する能力と正確に理解する能力を基盤とし、人と人との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言葉によってお互いの気持ちや思いをやりとりする力を向上させることである。社会生活に必要な、言葉による伝え合いの大切さを自覚して「伝え合う力」を高めることは、人間形成に資する国語科の重要な指導内容となる。

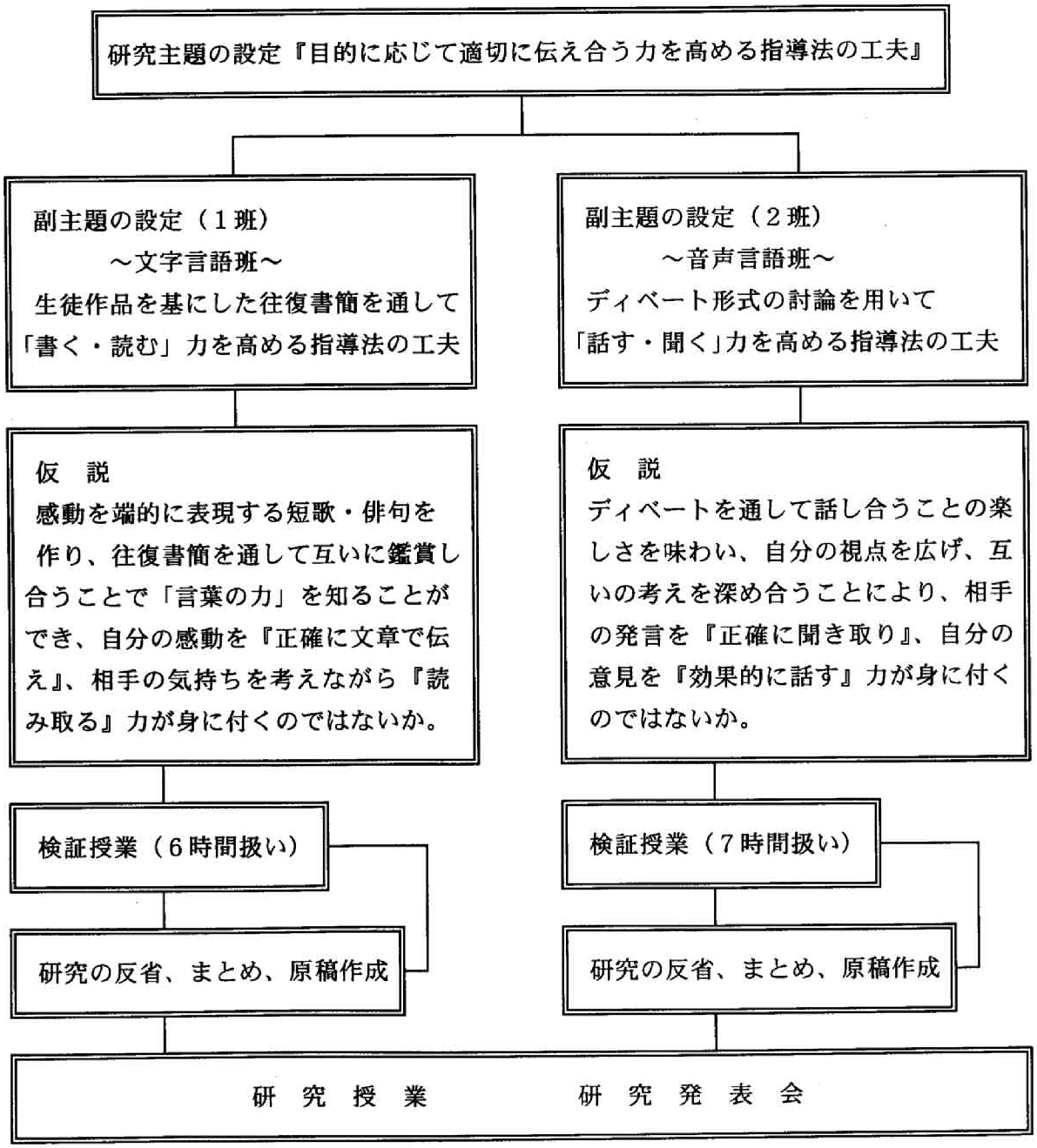
先に述べた子どもの現状と、来年度から完全実施される新教育課程における、国語科の授業の質的な改革を図るために、本部会では標記研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の構想

1　基本的な考え方

今、国語科に求められている「伝え合う力」とは、一方的なものではなく、相互的な言葉のキャッチボールを続ける力である。相手の書いた文章を読み、自分の考えを適切な文章にまとめて相手に返す。また、相手の話を聞いて、自分の考えを適切な言葉にして相手に返す。この繰り返しである。単に相手の考えを知るだけではなく、自分の考えを持つということで、互いの「理解力」と「表現力」が高められ、「伝え合う力」の向上にも結びつくのではないかと考えた。

2　研究の流れ



3　研究の方法

前述の基本的な考え方に立ち、班を二つに分け、それぞれの班で、音声言語、文字言語両面から、指導方法の工夫・改善を重ねながら研究を進めた。

1　班

１班では本研究の推進に当たって「生徒作品を基にした往復書簡を通して書く力・読む力を育てる指導法の工夫」という副主題を設定し、文字言語を中心とした指導法の工夫を試みた。的確に表現し理解する力を高めるとともに、言葉を用いて気持ちを伝え合う力を高めたいと考えた。活動の基になる作品には、言葉を吟味し、少ない字数で感動を表現できる短歌や俳句を、生徒の発達段階に応じて選ぶことにした。全ての生徒が、学習活動に自主的に参加できるようにワークシート等に工夫を凝らした。また、今回の単元に入る前に、短歌や俳句を初めて作る生徒がいることを想定し、それらの基礎的な事柄を指導し、作品作成や鑑賞文についての指導も行った。

まず、作品（短歌や俳句）を作らせ、自分の感動を的確に表現するために言葉を吟味させた。次に、作品を生徒に鑑賞させ、作者の感動を理解させた。自分の考えや気持ちを明確に表現した文章を感想カードに書かせ、作者への返信とした。その際、読み手の気持ちを配慮するよう指導した。感想カードを読んだ作者には、共感を得た喜びや自分の言葉が思いも及ばない情景を想像させることの驚きを正確に表現させ、返信カードに書かせた。その後、発表会を行い、生徒たちが相互に学べるようにした。

最後に、今までの活動を振り返り、初めの作品（短歌・俳句）を推こうすることでまとめとした。

2　班

２班では本研究の主題をもとに「ディベート形式の討論をもちいて話す・聞く力を高める指導法の工夫」という副主題を設定し、音声言語を中心とした授業を試みた。

ディベートでは相手を説得するために、明確な根拠を持って効果的に話すことが必要であり、その前提には相手の言葉を正確に聞く（聴く）ことが必要となる。

まず、立論にあたっては生徒にとって身近な論題を設定した。こうして生徒の一人一人に自分の意見を持ちやすくさせることで、討論の準備のための班の話し合いや、討論に臨む意欲を高めることができると考えた。また、班の話し合いや討論を通して、自分の意見の広がりと深まりを実感させることができると考えた。

また、討論の場面では言葉のキャッチボールを重視するとともに、班の中での話し合い活動を保証することで、お互いに助け合いながら、「話す・聞く」力を高め合う活動を目指した。さらに、自己評価を活用することで、自己の学習の成果を振り返らせるとともに、相互評価を発表させることで「話す・聞く」力を高める意欲を喚起させるようにした。

一方、審判にあたる生徒は客観的な立場で「聞く」力を身に付けられるとともに、有効に「話す」方法を学ぶことができると考えた。

最後に、これらの音声言語を中心とした活動を様々な観点から振り返り、文章として表現することでまとめとした。

Ⅲ　研究の内容

1　１班（文字言語班）

（1）ねらい

情報通信機器の流通が盛んになり、ＩＴ革命と呼ばれる時代の中、子どもたちを取り巻く言語環境はすさまじい勢いで変化している。特にインターネットや携帯電話の利用は、中学生にとっては、日常のこととなっている。

特に、メールと呼ばれる、断片的な言葉のやり取りや顔文字などの独特の表現を通して、仲間同士のコミュニケーションを図るのが流行している。

本来、人間の言語活動は、文字と音声によって支えられているが、文字表現、音声表現とも、正確な「ことば」によるやりとりが影を潜め、表現内容も乏しい断片的な単語のやり取りだけに終始しているように思われる。

社会がより高度化・複雑化し、様々な情報通信機器によって、伝える方法も多様化し、便利になってきた。

しかし、その反面、子どもたちの「ことば」の使い方・表現方法などには、未熟な面が多くうかがえる。単純な言葉の投げかけ、受け止めが安易に行われ、それが楽しければよい、仲間同士で分かりあえばよいというような伝え合いが行われているように思われる。

そのような言語環境の中で、言葉のもつ力、言葉の大切さを認識させるために文字言語で表現した俳句・短歌などの、我が国独特の表現技法を通して学習できないかということから、本研究は始められた。

次年度から実施される学習指導要領においても、「伝え合う力」が重要視されている。一方的な言葉の投げかけや鑑賞ではなく、コミュニケーションを大切にしながらも、わが国の言葉のもつ力、美しさ、不思議さなどに興味や関心を持たせたい。そして、それらを意識して、積極的に伝え合う言語学習としての学習活動を目指した。

自分の気持ちや考えを表現するために、限られた文字数を工夫し、言葉を吟味し、他の人の意見を参考にしながら、よりよい作品を作り上げ、それをもとにした互いの心を伝え合う学習は、子どもたちにとって、とても新鮮で有意義な学習活動になると考える。

また、子どもたち同士で気軽にやりとりされる文字情報についても、その情報を受け取る側には、正確に理解し、判断する力が、発する側には、効果的に表現する力を身に付けることができると考える。

以上のように、生徒の創作した短歌・俳句作品による「書く・読む」力を育てる学習を通して、「伝え合う力」を高め、子どもたちがより良い言語環境を築けることを、最終的なねらいとした。

本研究を通して、「ことば」の力を再認識させ、身近な「ことば」を尊重する態度を育てていきたいと考えている。

(2) 指導の実際

①【研究主題との関連】

副主題

「生徒作品を基にした往復書簡を通して書く力・読む力を育てる指導法の工夫」

生徒の言語生活においては、書く・読むといった一方向的な伝達や、安易な伝え合いが多いように思われる。

１班では、学年に応じて、短歌・俳句といった生徒作品を基にした往復書簡を通して、互いの心を伝え合う力を高めていくことによって研究主題に迫ろうと考えた。読み手に伝わるように自分の感動を短歌・俳句に詠み込むこと・往復書簡から自分の考えや気持ちを分かりやすくまとめることは、読む力と書く力の両面の育成につながる。更に、発表会における作品やカードの伝え合いや他の生徒の言葉のやり取りから、作者は自分の作品を見つめ直すことになる。

このことは、文字言語を通してその目的に応じて伝え合う力を高めていくものと考える。

②【使用教材】

生徒の短歌・俳句作品を基にして学習する。補助教材として、「第14回現代学生百人一首（東洋大学選）」、「三十一文字のパレット（俵　万智著　中央公論社）」「かんたん短歌（桝野浩一著 筑摩書房）」を使用する。

③【指導の手立て】

ア　自分の心情が読み手に伝わる作品を作成する。

自分の心情が読み手に伝わる短歌・俳句を作成する。限られた文字数の中で言葉を吟味し、工夫し、更に練り直す。そこからまず、文字言語を通して相手に伝えていく力をはぐくむことを考えた。

イ　自分の気持ちや考えを相手に分かりやすく「感想カード」「返信カード」に記入し、お互いにやり取りする。

作品を通して、その意味や作者の心情を読み取り、その上で自分の考えや感想が作者に的確に伝わるように文章を書く。この活動は、作品を読み取る力を高めると考えた。

ウ　発表会を通じて自分の作品を練り直す。

往復書簡の内容を発表することは、言葉のやりとりを再現し、自分の言葉を再認識することになる。発表会でのやりとりやカードの内容を踏まえて作品を推こうすることで、言葉の大切さ・伝え合うことの大切さを知り、書く力を高めていくことになると考えた。

④【指導目標】

ア　日ごろ自分たちが言葉によって生活していることに気付き、言葉の大切さを再認識する。

イ　作品を基に、自分の考えや感想を明確にし、分かりやすい文章にまとめる。

ウ　意見の交換を通して、自らの作品を見直す。

⑤【指導計画】（6時間扱い）

時	学習活動	指導上の留意点
1	テーマに沿って短歌を詠む① 1年　Bアウ　Cア　「言語事項」ウ 2・3年　Bア　Cア　「言語事項」ウ ○単元の目標を聞き、学習計画を立てる。。 ○資料を読み、短歌の基礎的な知識を再確認する。 ○今回作る短歌のテーマを確認する。 ○テーマを選び、どんなことを詠むか、どんな思いを詠むかを考えて短歌を作る。	○「現代百人一首」や「かんたん短歌の作り方」など現代短歌のプリントを使用する。 ○テーマの例「自然・恋・季節・友情・学校生活・社会の出来事」 ○短歌の定義は 1定型 2普段の言葉を使う 3感情を表す言葉は使わない 4読み手を意識した作品作りをすること ○国語辞典・歳時記などの活用を促す。
2	テーマに沿って短歌を詠む② 1年　Bアウエ　「言語事項」ア 2・3年　Bアエ　「言語事項」ア ○短歌の定義とテーマを確認する。 ○短歌を作り、推こうする。ノートに書く。 ○ノートに書いたものの中から一首を選び、印刷用紙と掲示用紙に短歌を書く。 ○作品を提出する。	○プリントを用意する。 ○テーマを決めさせる。 ○前時に作れなかった生徒に対し、机間指導で短歌を作る手順を分かりやすく説明したり、助言したりする。 ○氏名も書かせ、文字の大きさ・配列・配置に気を付けさせる。
3	感想カード作りをする。 1年　Bイエ　Cエ 2・3年　Bイオ　Cエ ○前時に作成した全員の短歌を読む。 ○自分で選んだ短歌について感想カードに書き込む。 ○カードを提出する。	○プリントに全員の作品をまとめておく。 ○何首か詠み、例示する。 ○全生徒に対して2枚以上のカードが届くように工夫する。 ○共感した部分やどうしてその作品にひかれたのかを特に詳しく書くように指示する。 ○感想カードには、作品の解釈と感想を書かせる。

4	返信カード作りをする。 1年　　Bイエ　Cエオ 2・3年　Bイオ　Cイエ ○感想カードを受け取る。 ○感想カードを読み、それぞれの意見について考える。 ○返信カードを書く。	○作品の解釈と自分の意図したこととの共通点や相違点に気付かせる。 ○自分の作品の長所・短所について気付かせる。 ○作品で表現しようとした情景や感動を、まとめさせる。 ○理解されたことへの喜びや、理解されなかったことへの説明、自分の作品について見直せたことなどを文章にまとめさせる。
5（本時）	発表会を行う。（本時） 1年　　Aアエ　Bオ 2・3年　Aアエ　Cカ ○発表会の手順を確認する。 ○短歌発表会 1．短歌作品を詠む。（短歌の作者） ↓ 2．感想カードを読む。（感想カードの作成者） ↓ 3．返信カードを読む。（短歌の作者） ↓ 4．返信カードを受けて感想を述べる。 （感想カードの作成者） ↓ 5．互いにカードを交換する。 ○短歌作品の推こうの仕方を学ぶ。	○発表会の手順を図示し、流れを確認させる。 ○カードをそれぞれの作成者に返却する。 ○発表させる短歌作品は8首程度とし、作品は黒板に掲示する。 ○感想のまとまらない生徒には適宜助言を与える。 ○感想カードは作品の作者に、返信カードは感想記入者に返却させる。 ○字句の置き換え、語順の変更を例示し、生徒作品の推こう例も紹介する。
6	短歌の推こうと見直しをする。 1年　　Bイエ　Cオ　「言語事項」ウ 2・3年　Bオ　　Cウ　「言語事項」ウ ○前時の推こう例を振り返る。 ○作品の練り直しを行い、掲示用紙に推こう後の短歌を記入する。 ○工夫のポイントを掲示用紙に記入する。 ○自己評価カードを記入して今回の単元の学習内容を振り返る。	○推こうの意味を十分理解させながら、積極的な姿勢で取り組むように指導する。 ○簡単な感想も含めて丁寧に記入させる。

【 第５時指導案】

ア．目標

① 作者・鑑賞者それぞれの立場で、短歌についての意見や感想を伝え合う。

② 意見の交換を通して様々な考え方があることに気付き、認め合う。

③ 推こうの仕方の基本を学び、自らの作品を見直させる。

イ．展開

	時間	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	３分	○本時の流れを確認する。	○短歌発表会を通して、様々な考えがあることに気付かせる。推こうの仕方を学び、短歌の練り直しの基礎とさせる。
展開	４分	① 発表会の手順を確認する。	○発表会の手順を図示し、流れを確認させる。
		学習の目当て ①文章で伝えたことを相手はどのように受け取っていたかを考えよう。 ②各自が発表を聞いて考えたことや感じたことをメモしよう。 ③発表者は声の大きさや話す速度を工夫して、伝えたい内容が聞き手によく分かるようにしよう。	
	30分	②『短歌発表会』 （「話すこと・聞くこと」ア、エ） １．短歌作品を読む。（作品の作者） ↓ ２．感想カードを読む。（カード作成者） ↓ ３．返信カードを読む。（作品の作者） ↓ ４．返信カードを受けて感想を述べる。（感想カード作成者）） ↓ ５．互いにカードを交換する。	○発表させる短歌作品は８首程度とし、作品は黒板に掲示する。 ○感想のまとまらない生徒には、適宜助言を与える。

	10分	③　短歌作品の推こうの仕方を学ぶ。 （「書くこと」１年エ、２・３年オ）	○感想カードは作品の作者に、返信カードは感想記入者に返却させる。 ○字句の置き換え、語順の変更を例示し、生徒作品の推こう例も紹介する。
まとめ	3分	○次時の予告をする。	○発表会を踏まえ、より人の心に伝わる洗練された表現を工夫するよう指示する。 ○カードを次時に持参するよう指示する。

ウ．評価

①　作者・鑑賞者それぞれの立場で、短歌についての意見や感想を伝え合うことができたか。
（「話すこと・聞くこと」１年ア、２・３年ア）

②　意見の交換を通して、様々な意見のあることに気付き、認め合うことができたか。
（「話すこと・聞くこと」１年エ、２・３年エ）

③　推こうの仕方の基本を学び、自らの作品を見直すことができたか。
（「書くこと」１年オ、２・３年カ）

（資料１）

『伝え合う言葉　～短歌を通して～』　二年　組　短歌作品

99摩の山電車の窓に映るとき　君を見つけて風光りだす

アメリカよ　なぜアフガンと殺し合う　日本参戦　絶対反対

あのトの　心のナゾミ　覗きたい　私のことは　どう映ってるの？

教室で　空を眺めて　思うこと　今あの人は　何してるのか…

一人きり　かなしい時に　ふと見れば　あなたの笑顔　勇気をくれる

授業中　貴方に送る　メッセージ　私の思い　届くといいな

授業には　心地よすぎる　誘惑の　睡魔によばれて　つれさられる

分からない　私の事を　どう思う　あなたの心　教えてほしい

まこれいごと　それなもの　では埋まらない　友と私の　心の絆

「付き合う」　その言葉だけに　意味はない　二人の心は　離れているから

（資料２）

返信カード 1年1組 番（　　）さんへ

短歌
草もない　鳥も来ない　単調に　チョークのちょうが　舞い降りた
の作者（　　）より

【自分が伝えたかったこと・表現したかったこと】
私は先生が黒板で何かをかこうとしている。チョークをもって。そのチョークが白だったら授業がおもしろくなる。ノートに書きうつさなくてすむ。先生が書こうとするたびチョークがチョウにかわる。そんな魔法のようなことがおこれば…。そう思ってかいたんだと（いうか作った）思います。

【鑑賞カードを読んで感じたこと・思ったこと】
そうだね。「草もなくて鳥もいない」ってちょうにはかわいそうだよね。自分のことしか考えないで作ってしまったと思いました。
でも、　さんの考えるように、チョウがいっぱいとんでくれればかわいそうじゃなくなるかもしれない。
ちょうの気持ちを思い出させてくれてありがとう。

返信カード 1年1組 番（

短歌
ゴミ袋　ポツンと一つ　道ばたに　内臓とびでて　オ
の作者

【自分が伝えたかったこと・表現したかったこと】
朝、学校に行く途中。その日はゴミの日じゃないが…。いやだなぁと思いながらその道を通ろと…
いる。その中から中身（内臓）がでていて、いやなにおいのオーラがただよう。こんな感じ。

【鑑賞カードを読んで感じたこと・思ったこと】
なかなかいい所についています。ただ内臓とびでて此は、自分がそれほどゴミ袋のにおいがきらいという感じになっていますが、私は、ゴミ袋からゴミ袋の内臓がでているようにしたかったです。でも、そういう意味でもまちがいではないと思います。いかにゴミ袋のにおいがいやかをものがたってます。

返信カード例

（資料３）

感想カード 1年3組 番 氏名（　　）

短歌
友達と思ってたのに離れてく　追えば追うほど幅は大きく
の作者へ（　　）さんへ

★大意
追うから友達も離れてしまう。友達というものは追っていかなくて…
たしかに幅は大きいかもしれない
は短い。
と点）
かの感じたきょり感でしかないもの
うぶ。

感想カード 一年二組 番 氏名（　　）

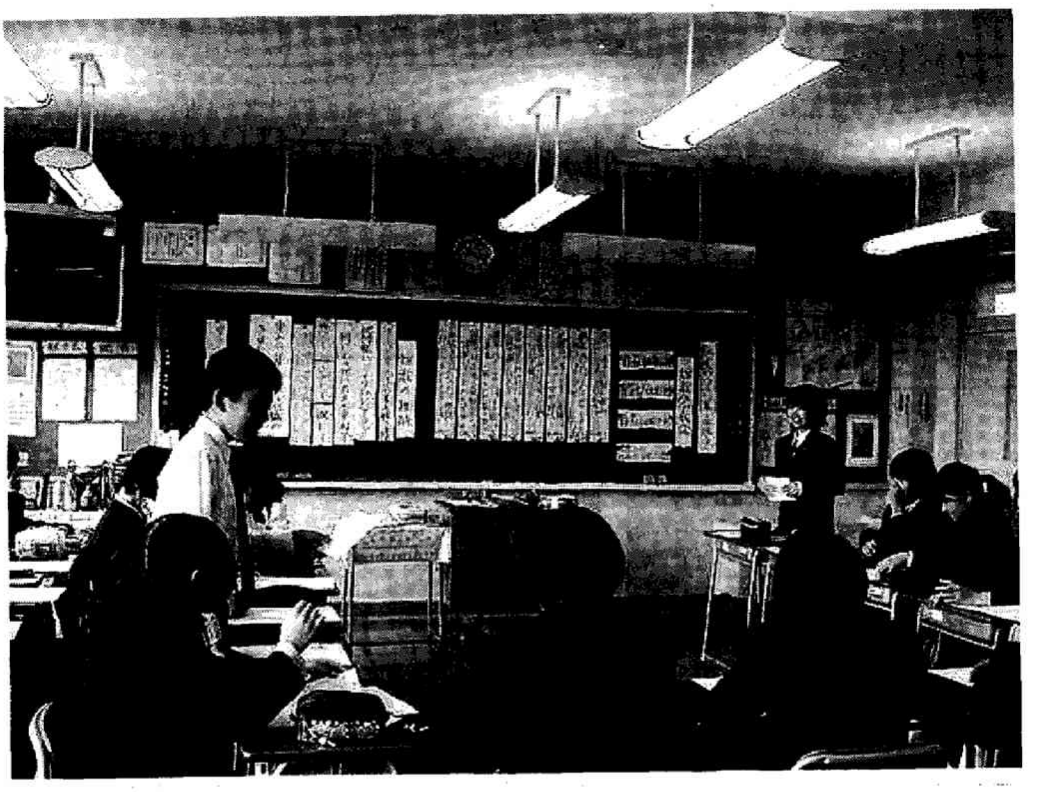
短歌
秋の日の夕日がしみる帰り道　みんな細目でまっかな背中
の作者へ（　　）

★大意
秋の日の午後の帰り道に友達と歩いていて、ふと前にいるみんながなんか細目（小さく見える）の感じ。そして、そのみんなの背中に夕日がかがやいて見えるところが少しさみしさをそそる。

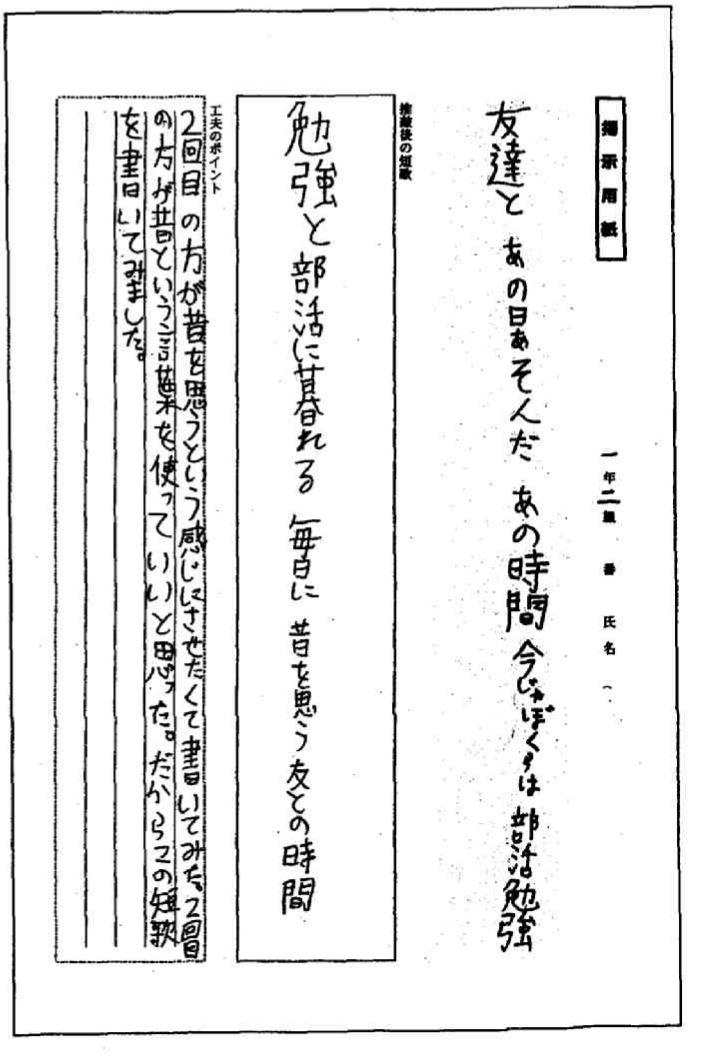
★全体の感想（工夫が感じられる点、よかった点）
秋と言ったらやっぱり夕日、その夕日でみんなの背中がまっかにそまる。とっても絵をかいたりしたらきれいだと思う。そして、その絵が頭の中にうかぶ。そんなやさしい短歌だった。

感想カード例

（資料４）



（資料５）



掲示用紙

一年二組　番　氏名（　　）

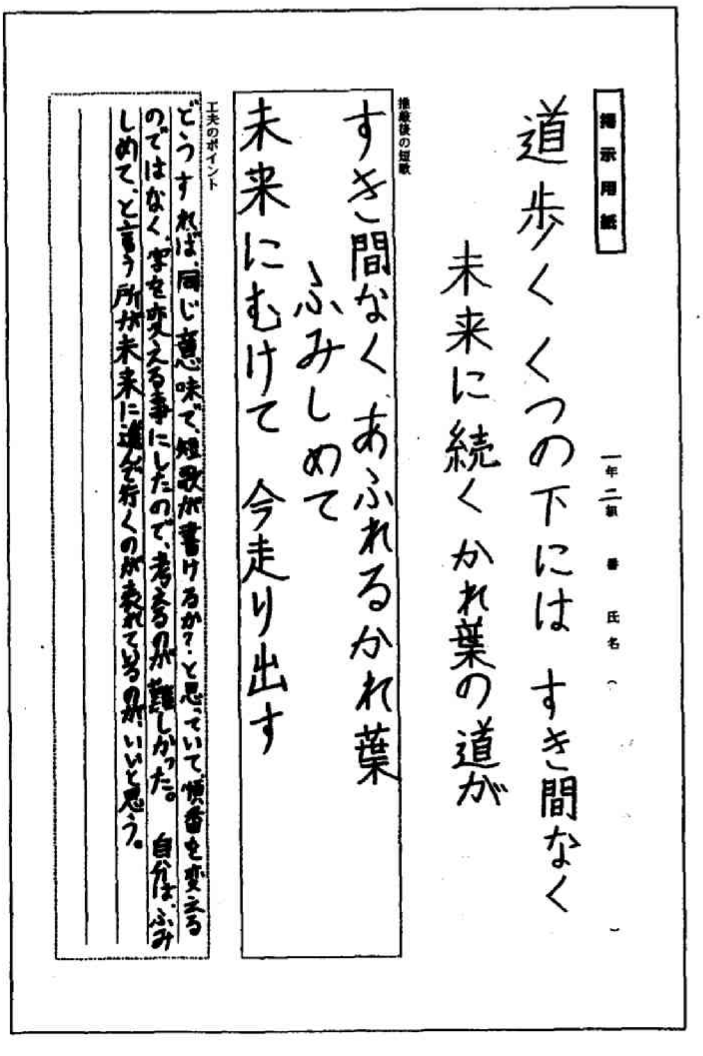
友達と　あの日あそんだ　あの時間　今じゃぼくらは　部活勉強

推敲後の短歌

勉強と　部活に暮れる　毎日に　昔を思う　友との時間

工夫のポイント

2回目の方が昔を思うという感じにさせたくて書いてみた。2回の方が昔という言葉を使っていいと思った。だから2の短歌を書いてみました。



掲示用紙

一年二組　番　氏名（　　）

道歩くくつの下には　すき間なく

未来に続く　かれ葉の道が

推敲後の短歌

すき間なく　あふれるかれ葉

ふみしめて

未来にむけて　今走り出す

工夫のポイント

どうすれば、同じ意味で、短歌が書けるか？と思っていて、順番を変えるのではなく、字を変える事にしたので、考える所が難しかった。自分で、ふみしめて、と言う所が未来に進んで行くのが表れている所がいいと思う。

（3）まとめ

１班では、副主題にそって文字言語で相手と気持ちを通い合わせることの難しさに気付かせ、その重要性を実感させるために検証授業を重ねた。ここでは、その過程で得られた成果をまとめてみたい。

① 考　察

ア　短　歌

短歌の作成については事前に基本的な事柄を指導し、短歌の作成や鑑賞文についての指導を重ねた。当初、事実をそのまま詠むのではなく、その時の感情を伝えられるように詠むということに戸惑いを感じた生徒もいたようだ。しかし授業が進むにつれて、短歌を通して自分の気持ちに共鳴してくれる相手がいることに充実感をもつようになっていった。そのため、生徒たちはより内容に深みのある短歌を詠むという意識をもつようになった。

イ　鑑賞と感想カード作り

作品の鑑賞を徹底することで、作品の第一印象で終わらない感想を得られた。鑑賞については注意点を明確にすることで深い言葉の分析ができるようになった。また、感想文を短歌の作者に手渡すことで、文章を書くときに読み手を意識することの大切さを実感できた。

ウ　作者からの返信カード作り

自分の詠んだ作品を基にした交流は非常に有意義であった。感想カードには作者が思ってもいないような情景を想像したケースも含まれており、自分の発した言葉の反響に驚いた生徒もいたようだ。そのため、新たな短歌作りの時には初回よりも慎重に適切な言葉を選ぶ姿勢が見られた。

② 今後の課題

ア　今回の研究では、言語を通して気持ちを伝え合うことに重点をおいた。文字言語は現代社会においてインターネットや携帯電話のメールのやりとりなどで活発に利用されているが、受け手の理解力に大きく左右される面もある。情報の受け手としての能力を高める指導は更に進める必要があるだろう。

イ　現代短歌作りのきっかけとして、「現代学生百人一首」（東洋大学　選）や「かんたん短歌の作り方」（枡野浩一著　筑摩書房）「三十一文字のパレット」（俵万智著　中央公論社）などを利用した。これらの超現代短歌とも言うべき分野はまだ研究例が少なく、作る楽しみだけで終わらないような指導法の工夫を今後も考えていきたい。

2　2　班（音声言語班）

(1) ねらい

現代のようにすべてのものが巨大化、複雑化した社会の中では、一人の人間ができることには限りがある。この現代を生き抜くためには、他人と協調して知恵を出し合い、新しい考えを生み出して課題に対処し、解決していく力が必要となる。 しかし、その一方で現代の子どもたちの人間関係のあり方が懸念されている。自分の主張はするが、相手の考えを受け入れることができない子ども、また相手の考えを理解しようと努力する姿勢に欠ける子どもも多い。多様な価値観の中で、明確な判断基準を見失いつつある社会の中で、お互いの考えや意見、つまりは人間性を認め合い、尊重し合う姿勢が乏しくなってきているとも言える。

そうした中で、平成14年度からの学習指導要領でも述べられているように「伝え合う力」、つまりコミュニケーション能力の育成ということが、これからの国語科に求められている。そのためには、何のために（目的・必要性）、だれに対して（相手）、何を（表現内容）、どのように（方法・技術）伝え合うのかを明確に意識させることが大切である。そして、言葉により相互の気持を交流させること・相互を正しく理解すること、相互を尊重することの大切さを、経験を通して学ばせることが、生涯に渡って必要な「生きる力」の基盤となるはずである。

そこで２班では音声言語を通して、「目的に応じて適切に伝え合う力を高める指導法の工夫」を研究した。その中でディベート形式の討論を用いることで、互いの立場や考えを尊重して、伝え合う力を育てることができると考えた。また、異なる意見に触れることで多面的な見方・考え方が身に付き、お互いの考えを深め合うことができると考え、指導の手立てを工夫した。はじめに、「目的に応じて」という面では、相手を説得するという目的には相手への誠意を持ち、根拠をしっかりと持つことが重要であることに気付づかせた。

次に、「伝え合う力を高める」という面では、まず伝え合う内容をしっかり持っていなければならないという認識に立ち、それには何を話したいか、あるいは聞きたいかという主体的な欲求が不可欠であることから、身近な論題を設定し、それに対する一人一人の考えを書かせた。そして、実際の討論の場面では、お互いが相手の立論を正確に聞き、ポイントをつかみ、それに質問をし、または応答するという、いわば言葉のキャッチボールが円滑に進むように配慮した。

また、この学習活動の中で配慮したのが、討論の場面以外での班の中での伝え合いの活動である。立論・質問やそれに対する応答・結論を述べる場面での班ごとの話し合い活動を通して、伝え合う力を高める意欲を喚起させられるよう工夫することで学習のまとめとした。表現の方法は、目的や相手や場面に応じて変化するものである。それは今後さらに加速するであろう情報化・国際化の社会の中でますます多様化してくることが予想される。本研究の音声言語を中心とした活動を通して、効果的に話すことと、その前提となる正確に聞く（聴く）ことの重要性に気付かせ、その方法を主体的に学んでいく態度を育てていきたいと考える。

(2) **指導の実際**

① 【研究主題との関連】

副主題「ディベート形式の討論を用いて話す・聞く力を高める指導法の工夫」

２班では音声言語活動を通して伝え合う力を高める方法として、ディベート形式の討論を行い適切な表現の方法を学ばせようと考えた。ディベートの有効性は認識されていても、これまで意外に授業者が踏み込んでいない現状が多いことを感じた。その上で、誰もが行えるよう初めてのディベートという機会をとらえ、ディベートの指導法の工夫をこころみた。さらにディベートの形式を学んだ上で回数を重ねていくことがコミュニケーション能力の育成の上でも重要であると考えた。

② 【使用教材】

補助教材として「小学校ディベート授業入門」（学事出版）のビデオを使用した。

③ 【指導の手立て】

ア 筋道を立てて話すための力を付けさせる

根拠を明確にして筋道を立てた話し方を学習する。ワークシートを効果的に用いることによって、肯定側・否定側どちらに立っても、立論できるようにした。また、準備に要する時間を十分に取り、自信を持って発言できるように工夫した。

イ 論題を工夫する

発達に応じた各学年・生徒の実態により、興味や関心のある論題を設定する必要があると考えた。初期の段階では、資料収集のあまりいらないもの、又は収集が容易なものを与えたり、選ばせたりよう配慮した。

ウ 論点がかみ合うように適切な指導を工夫する

伝え合う活動をより活性化するために、授業者は適切な評価やアドバイスを行い、それにより論点を常に明確にとらえつつ、討論が行われるよう努めた。

エ 一人一人が生き生きと活動できる場を設ける

班の中での分担を明確にし、役割を与えることによって一人一人の活動の場を保証するように心がけた。振り返り記録を活用し、それぞれの活動を高めたり、相互に評価したりすることによって、互いの活動を認め合うようにした。

オ 正確に聞き取り、批判的に聞いたりする力・的確に論点を整理し、説得する力の育成に努める

相手側の立場と自分側の立場を明確にしながら、言葉のキャッチボールを行う。学年・生徒の実態によって形態・方法を変えることによってより充実した討論ができるよう努めた。回数を経ていくことにより話し合う活動を楽しめるようにしていく。

④ 【指導目標】

ア 「効果的に話す力」を伸ばす。

イ 相手の発言を「正確に聞き取り」、「批判的に聞く力」を伸ばす。

ウ ディベートを通して、話し合うことの楽しさを味わうとともに、自分の視点を広げ、お互いの考えを深め合う。

⑤【指導計画】（７時間扱い）

時	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点
1	ディベートについての理解 １年　　Ａアウエ　Ｂイ「言語事項」エ ２・３年　Ａアイエ　Ｂイ「言語事項」エ ○授業のねらいを理解する。 ○ビデオ「ディベート入門」を視聴し、ディベートの全体の流れについて理解する。 ○今後の授業計画について説明を聞く。 ○提示された論題を理解する。 ○対戦相手と論題を決める。 ○論題に対するメリット・デメリットを各個人が考え、「ディベート準備シート」に記入する。	○ディベートの形式を説明する。 ○判定前に一度ビデオを止めどちらの勝ちかを考えさせる。 ○日常の班単位で行うことを説明する。 ○論題と定義を書いた紙をあらかじめ用意しておいて示す。 ○記入した「ディベート準備シート」を使い、次時に話し合いを行うことを説明する。
2	ディベートの準備① （チーム内の役割分担と立論準備） １年　　Ａアウエ　Ｂイオ　「言語事項」エ ２・３年　ＡアイウエＢイエカ「言語事項」エ ○「ディベートの流れと役割分担」に沿って説明を聞く。 ○「ディベート準備シート」を使い、チームの立論を考え、「立論シート」（資料１）に記入する。 ※立論を考える際の手順 ・各個人の意見を検討し、メリット・デメリットを整理する。 ・論点の根拠となる事項を考える。 ・根拠となり得る情報・資料を集める。 ・資料をもとに論点（２つの柱）を決める。 （重要性・深刻性を整理する） ○振り返り記録用紙に話合いの反省を記入する。	○ワークシートの使用によって、立論や反論の準備を容易にする。さらに、実際にディベートを行う時の話し方の理解へとつなげる。 ○立論の根拠は時間の制約上２つまでとすることを説明する。 ○話し合いの時に心がけることとして ・自分の意見を持ち、伝えること ・相手の意見を正確に聞き考えること ・協力してまとめること の大切さを説明し理解させてから話し合いに入らせる。 →振り返り記録用紙に記入する観点 ○立論を考える時には、反論を考慮しながら考えるよう説明する。 ○記入する時間を十分確保する。
3	ディベートの準備② （審判についての理解及び質疑の準備） １年　　Ａアウエ Ｂイオ　「言語事項」エ ２・３年　Ａイウエ Ｂイエカ「言語事項」エ ○「判定表」の記入の仕方と審判についての説明を聞く。 ○相手の立論（２つの柱）を予想する。 ○「反論シート」（資料２）を使い、予想した立論に対する反論を考え、記入する。 ○予想される相手からの反論を考える。	○「判定表」を使い、評価表の記入の仕方と審判の仕方を説明する。 ○話し合いについては前時の「話し合いの時に心がけること」を再度説明する。

	○予想した反論に対する答えを「応答シート」（資料３）に　記入する。 ○振り返り記録用紙に話し合いの反省を記入する。	○記入する時間を十分確保する。
4	ディベートの準備③ （班内リハーサルと結論準備） １年　　Ａアウエ Ｂイオ　「言語事項」アエ ２・３年　Ａイウエ Ｂイエカ「言語事項」アエ ○「結論シート」（資料５）を使い、結論を考え、記入する。 ○班内でディベートのリハーサルを行う。 ○結論の補強について考える。 ○ディベート時の隊形等について説明を聞く。 ○振り返り記録用紙に話し合いの反省を記入する。	○リハーサルは、質疑応答の準備を重視させる。 ○自分たちの反論と相手側の答えが結論の補強になっているか考える。 ○ディベート・審判・見学はそれぞれ２班で行うことを説明する。 ○記入する時間を十分確保する。
5	ディベート実施　第１回 １年　　Ａアウエ Ｂイ「言語事項」アエ ２・３年　Ａイウエ Ｂイ「言語事項」アエ ○感想を話し合う。	○１回目なので教師が丁寧に進行する。 ○最後の見学者・ディベーター・審判からのコメントの中で、参考とすべき意見には特に注意を促す。
6	ディベート実施　第２回 １年　　Ａアウエ Ｂイ「言語事項」アエ ２・３年　Ａイウエ Ｂイ「言語事項」アエ ○前時の反省を教師から聞き、確認する。 ○感想を話し合う。	○「自己評価表」（資料４）に記入された意見の中で参考になるものを紹介する。 ○前時の見学者・ディベーター・審判からのコメントの中で参考にすべき意見を話し、確認させる。
7	ディベート実施　第３回（本時） １年　　Ａアウエ Ｂイ「言語事項」アエ ２・３年　Ａイウエ Ｂイ「言語事項」アエ ○前時の反省を教師から聞き、確認する。 ○全員が「ディベート授業を終えて」を記入する。 ○「ディベート授業を終えて」（資料６）を元に活動の成果を発表する。 ○指導者から本学習の成果と今後の課題について聞く。	○「自己評価表」に記入された意見の中で参考になるものを紹介する。 ○前時の見学者・ディベーター・審判からのコメントの中で参考にすべき意見を話し、確認させる。 ○記入する時間を十分確保する。 ○できるだけ多くの生徒に発表させる。

［本時の指導案（第７時）］

ア　目　標

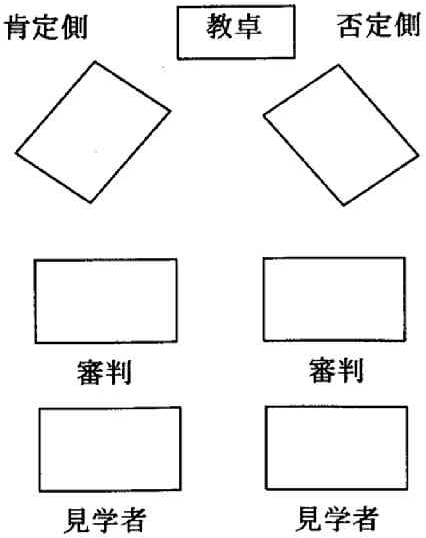
1.　意見と根拠となる事実の関係に注意して、論理的な話し方をする。

2.　話し合い中に要点をメモし、根拠をはっきりと確認しながら聞く。

3.　声の大きさや速度に注意して、簡潔で分かりやすい話し方をする。

4.　様々な意見を聞くことにより、視点を広げ、自分の考えを深める。

イ　展　開

	学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点
導入	○「ディベート」の目的を確認する。 学習の目標 1. 発表者は声の大きさや速度に注意して、聞き手によくわかるように話そう。 2. 要点をメモしながら聞き、質問や自分の意見を述べるときに生かそう。 3. チームで協力して話し合い、自分たちの意見をまとめよう。	
	○発表の順番を確かめる。	○発表順を書いた模造紙を黒板右側に貼っておき、それを指導者が示す。 ○審判の班に「審判判定表」を配布する。
展開	○ディベートを開始する。 論題例「本校は標準服を廃止すべきである」 1. 肯定側立論・・・・・・・２分 2. 否定側立論・・・・・・・２分 3. 相手への反論と予想される反論（反論の答え）の準備　・・・３分 4. 否定側反論１・・・・・・・１分 5. 肯定側答え１・・・・・・・１分 6. 肯定側反論１・・・・・・・１分 7. 否定側答え１・・・・・・・１分 8. ４～７の繰り返し 予想されない反論に対しては「シンキングタイムお願いします」と伝えれば、１分の準備時間が取れる。 9. 結論準備・・・・・・・・・３分 10. 否定側結論　・・・・・・・２分	○司会、タイムキーパーは指導者が行う。（時間は１５～３０秒のゆとりをもたせる） ○論題は黒板中央に掲示しておく。 ○班ごとに肯定側、否定側、審判の班、見学者に分かれて座るので、座席の配置を工夫する。 （教室配置図）  ○４～７、９で、班の中できちんと話

	11. 肯定側結論 ・・・・・・・２分 12. 判定準備 13. 判定 ・・・・・12、13で３分 判定は二つの班の班長がそれぞれの班の意見をまとめて 相談して肯定側か否定側か勝敗を決める。 1～13・・・・計２５分（２９分） ○見学者が感想を述べる。 ○ディベーターが感想・相互評価を述べる。 ○審判が感想・評価を述べる。	し合いができているか確認する。 ○判定準備をしている間に、ディベートを終えた班に「自己評価表」を渡して記入するように指示する。 ○感想発表は良かった点を具体的に述べ合う場になるよう促す。
ま と め	○指導者の講評を聞く。 ○「ディベート授業を終えて」を記入しディベート授業を振り返り自己評価をする。 ○「ディベート授業を終えて」を元に活動の成果を発表する。 ○指導者から本学習の成果と今後の課題について聞く。	○本時のディベートの良かった点、課題等を話す。 ○ディベート授業の目標を各自が達成できたか振り返るよう指示する。 ○できるだけ多くの生徒に発表させる

ウ、評　価

1. 意見と根拠となる事実の関係に注意して、論理的な話し方をすることができたか。
2. 話し合い中に要点をメモし、根拠をはっきりと確認しながら聞くことができたか。
3. 声の大きさや速度に注意して簡潔で分かりやすい話し方をすることができたか。
4. 様々な意見を聞くことにより、視点を広げ、自分の考えを深めることができたか。

資料 1

立論シート

組　番　氏名

立論を話すときには、できるだけ相手が理解しやすいように話すことが大切です。そのために、次のような話し方を心がけてみましょう。

目的	話し方
自分（達）の立場をはっきりさせる。	「私（達）は、（○○中学校は標準服を廃止するべきである）と考えます。」
自分（達）の立場の根拠を説明する。 ※ 今回は時間の関係で2つまで。 ※ 根拠はできる限り具体的なものを使う。	「その根拠は2つあります。」 「1つ目は（服装のだらしない人が減る）ということです。 ~~つまり~~ 現在、標準服で、スカートやズボンの長さ、ボタン、くつなど校則にそわないつまり、「だらしない」格好をする人がいます。仮に標準服を廃止したとします。そうするとみんな和服になります。そうすると「だらしない」格好をする人が減ります。そうすると、服装のことでの先生との衝突がなくなり先生方との関係よくなり、学校生活も楽しくなる 様からです。」 「2つ目は（気候にあった服装ができる）ということです。 ~~つまり~~ 仮に標準服を廃止したとします。そうすると個人の体調などに合わせた服装ができます。そうすると防寒対策や身の体温調節が自由にできます。 そうすると、かぜなどが減りみんなが健康にすごすことができるようになる　が 様からです。」

メ　モ

（相手の発言をメモしよう）

1. 服装がみだれ、学校のふいんきが。
→わるいうわさがながれ生徒数がへる

2　まりが少なくなる

資料 2

反論シート

組　番　氏名

反論を話すときには、相手の立論に対する質問の形を心がけて話すことが大切です。そのために、次のような話し方を心がけてみましょう。

目的	話し方
相手の根拠をはっきりさせる。（相手の意見を正確に聞き取る。）	「あなた（達）は、和服にしたらもっとだらしない人がふえる ~~だから~~ 「きまりがへるとけじめがつかない。」 と言いました。」
相手の根拠について質問をする。 ※今回は時間の関係で2つまで。	・しかし、私（達）は そうだと思いません。 なぜなら、「ダメだ」と言われるとよけいにやりたくなり、反抗して、やる人がいるからです。このことを考えると、和服にした場合、自分の好きな格好ができるのでだらしない格好は増えない。 と考えます。あなた（達）はそう思いませんか。 または ・しかし、私達はそうだと思いません。 なぜなら きまりなどがへるからとけじめがつかないとは いいきれないからです。 1人1人がきちんと自覚することによって 制服を廃止しても けじめがつかなくなるというのは いいきれないと思います ~~ではありませんか~~。

メ　モ

（相手の発言をメモしよう）

資料3

質疑・応答の準備

予想される反論	反論に対する答え
私服にしたら、金銭にだらしない人が増える。	→ 私服にした場合、だらしない格好の基準がないから。
制服でも冬はセーター等を着ることによって、気候にあった服装はできる。	→ 確かにセーター等を着ることはできるが、それ以上着ることはできないし、夏はあれ以上ぬぐことができない。また、冬は女子はスカートだと冬寒く、男子は長ズボンだと夏暑い。

質問・反論への答え方

目的	話し方
相手の質問の要点をつかむ。	「あなた（たち）の質問は 制服でも冬はセーター等を着ることによって気候にあった服装はできる ということですね。」
適切に答える。	「それについて、私たちは 確かにセーター等（セーター・コート）を着ることはできると思います。しかし、それ以上着ることはできないし、夏はあれ以上ぬぐことができないのです。また、冬の場合女子はスカートだと寒く、男子は夏の場合長ズボンだと暑いので、制服だと気候にあった服装はできない と考えます。

相手への質問・反論

資料4

ディベート　自己評価表

（ 4 ）グループ　（肯定・否定）側　　年　　組　　番　名前

論題	○○中学校は標準服を廃止すべきである

1．ディベートの自分の体に合わせて評価しよう。

	時間(0)	評価の観点	評価
個人	立論	① 筋道（すじみち）の通った論を作ることができたか。	5 4 3 2 1
		② 根拠（こんきょ）・理由をしっかりと持っていたか。	5 4 3 2 1
		③ 相手にわかりやすく話すことができたか。	5 4 3 2 1
		④ 話す態度は良かったか。	5 4 3 2 1
	質疑反論	① 質疑反論の内容をわかりやすくまとめられたか。	5 4 3 2 1
		② 相手の立論を崩すのに有効な質疑反論だったか。	5 4 3 2 1
		③ 相手にわかりやすく話すことができたか。	5 4 3 2 1
		④ 話す態度は良かったか。	5 4 3 2 1
	応答	① 質問のポイントをしっかりつかむことができたか。	5 4 3 2 1
		② 質問にきちんと答えられていたか。	5 4 3 2 1
		③ 相手にわかりやすく話すことができたか。	5 4 3 2 1
		④ 話す態度は良かったか。	5 4 3 2 1
	結論	① 筋道（すじみち）が通っていたか。	5 4 3 2 1
		② 質疑の内容を生かすことができたか。	5 4 3 2 1
		③ 相手にわかりやすく話すことができたか。	5 4 3 2 1
		④ 話す態度は良かったか。	5 4 3 2 1
グループ	話し合い	① チームワークよく取り組むことができたか。	5 4 3 2 1
		② 積極的に話し合いに参加することができたか。	5 4 3 2 1
		③ 自分の考えを伝えることができたか。	5 4 3 2 1
		④ 他の人の意見を参考にすることができたか。	5 4 3 2 1

2．今日のディベートを振り返ってみよう。

(1) 自分自身を振り返ってみよう。…良かったこと。次はこうしたいと思ったこと。

きちんと班で話し合うことができた。
応答の時に、相手の反論をきちんと崩すことができたと思う。
今度やる時は、もっと有効なぎりぎりだ。をつかいたい。

(2) グループの話し合いを振り返ってみよう。…良かったこと。次はこうこうすると良いと思ったこと。

1人1人がきちんとできていた。
チームワークはがんばっていたと思う。

(3) 友達を振り返ってみよう…参考になったこと。感心したこと。

相手の班の反論がすごく「すじみち」がすごくあった。
みんな話をする時に少しきんちょしていたように思う。

資料5

結論シート

【結論を作るポイント…自分たちの立論の優位を訴えるには】
(1) 自分たちの立論の正しさを全を押す。補強する。
(2) 相手の立論が正しくないこと、不十分なことを指摘する。

（ 4 ）グループ （肯定・否定）側　　年　　組　　番 名前

1．結論の準備
…立論の時に言い足りなかった点や、根拠を補強し、自分たちの立論の正しさを訴える。

これから（ 肯定 否定 ）側の結論を述べます。
私達は　中学校は標準服を廃止すべきであると考えます。1つめのメリットは服装のだらしない人がへるということで、私服なので制服のときのように校則いはんをすることはないと思われます。
2つめのメリットは気候にあった服装ができることで自由な体温調節で健康管理がおこなえるためです。否定側のデメリットでは服装のだらしない人が急激にふえるといいましたが、私達はそれは正しくないと思います。
なぜならダメだと言われると余計にやりたくなり反抗してやる人がいるからです。このことを考えると私服にした場合、自分の好きな格好ができるので、だらしない格好はふえないと考え、このような理由でこのことはありうらないからです。
ということで私達は　中学校の標準服廃止を強く主張します。
他に、肯定側反論でのべたようにきまりがなくなるとだらしないといいますがふくそうについてのきまりがなくなるだけでなにも全ての生活のきまりがなくなるわけではないのでだらけるということはないと思います。
以上で（ 肯定 否定 ）側の結論を終わります。

2．ディベートの記録(1)

相手からの反論 ⇒	相手への応答

3．ディベートの記録(2)

相手への反論 ⇒	相手からの応答

4．結論の修正・補強
…『反論』⇒『答え』『応答』のやりとりの中で自分たちの立論に有利な点を補う。

資料6

ディベート授業を終えて

年　組　番 名前

討論題	○○中学校は標準服を廃止すべきである

1．（1）自分の役割分担　（質問・反論・応答 ）係

（2）自分の役割分担について、よくできた所とできなかった所

よくできた所	できなかった所
・応答の時にきちんと聞かれたことに対して答えられた。	・反論が少し アドリブになってしまった

2．チーム内の話し合いでは、
（1）積極的に自分の意見を述べることができたか？　はい　いいえ
（2）他の人の意見をしっかり聞くことができたか？　はい　いいえ
（3）自分のチームで一番説得力のある発言をしていた人は誰で、どんな意見か。

発言者（　　さん　　）
意見：
結論で、ぼう読みではなく強調したい所などがあってとてもよかったし、相手がうろたえるような意見だった。

（4）自分のチームはまとまっていたか？　はい　いいえ

3．本番のディベートでは、
（1）自分（たち）の論をしっかり伝えることができたか？　はい　いいえ
（2）相手チームの発言をしっかり聞くことができたか？　はい　いいえ
（3）相手チームで話し方の上手だった人は誰で、見習うべき点はどんなところか？

発言者（　　さん　　）
見習うべき点：
きちんと相手の質問にますして、答えられていた所

4．話を聞くときに気をつけたことは？

メモをきちんと書きながら、相手がいいたいことをきちんと考えられた。

5．すべての授業を終えてあなたの「話す力」「聞く力」は高まったでしょうか。高まったと感じたならば、それはどのような場面の時（何をしていた時）だったかもあわせて書いて下さい。

私は「話す力」が少しでも高まったと思います。自分の思っていることをきちんと発言できたし、反論の場で相手に聞こえやすく話せたと思います。

（3）まとめ

２班では、「ディベート形式の討論を用いて話す・聞く力を高める指導法の工夫」という副主題を設定し、研究を進めていった。ここでは、数回の検証授業を行いながら改善を重ね、得られた成果についてまとめてみることとする。

① 考察と研究の成果

ア ディベートについての理解

ディベート形式の討論の導入段階として、市販のビデオを用いて、ディベートの方法について理解した。話すために必要な事柄を理解し、根拠を持って話し、要点をとらえて聞くことの重要性に気付くことができた。ディベートが「話す・聞く」力を高めるために有効であることを理解し、興味・関心を促すことができた。

イ ディベートの準備

まず、ディベートの準備段階では、個人の意見を元に班で協力し筋道の通った立論を立てた。次に、予想される反論に対する答えを考えた。最後に結論をまとめた。展開の流れに沿って、ワークシートを用いて、相手を説得するためにしっかりとした根拠をあげておくことができた。筋道を立てて話すために、準備を十分にしておくことで、実際のディベートに役立てることができた。

ウ ディベートの実際

生徒は、班の中でそれぞれ自分の係に責任をもって活動した。ワークシートを用いて効果的に学習を進めることができた。また、応答・結論の際に班の中で協力して話し合うことができた。

エ ディベート形式を用いてみて

準備では、お互いの意見や考えを伝え合うことにより、よりよい考えを導き出すことができた。ディベートでは、相手にわかりやすい話し方を心がけたり、相手の話を聞くときに要点をとらえて聞くことの重要性を身をもって学習することができた。そして、班活動の場面での自己評価と相互評価を行うことによって、自分自身の課題に気付き、互いの良さを認め合い、伝え合う力を高める意欲が深まった。さらに、ディベートの回を重ねて、様々な立場（審判・見学者）を経験することができた。

② 今後の課題

ア 指導者として、生徒一人一人の言語能力を十分に評価することができたとは言い難い。来年度からの到達度評価実施に向け、従来のような集団の中での相対的な評価に片寄らない子どもたち一人一人がどの程度目標に近づくことができたかという視点での評価方法の工夫が必要である。また、Ｔ・Ｔ（ティームティーチング）や選択授業などでの活動を考えていくことも必要である。

イ ディベート形式の討論は、今後も「話す・聞く」の活動の一つとして、継続的に行っていく必要がある。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

本年度は、『目的に応じて適切に伝え合う力を高める指導法の工夫』を研究主題として研究を進めてきた。２１世紀を迎え、激しく変化していく社会の中で、よりよい社会生活を営んでいくためには、相互の理解を深め、豊かな人間関係を構築し、協力し合うことが必要とされる。ここに「伝え合う力」の重要性がある。互いの立場や考えを尊重しながら言葉を伝え合う力を高めることによって、子どもたちはいじめや不登校などの問題にも立ち向かう力を身に付け、更に、社会で生きていく力を身に付けることができるのである。

本研究では、音声言語と文字言語それぞれで「話す・聞く」力、「書く・読む」力を高める授業の工夫をし、「伝え合う力」の育成に取り組んだ。具体的には、１班（文字言語）は生徒作品を基にした往復書簡という形式の授業を行い、２班（音声言語）はディベート形式の討論による授業を行った。

１班では、生徒の作成した短歌について他の生徒が感想を書き、その感想を読んだ短歌の作成者が返信を書くという授業を行った。短歌の作成に当たり、生徒は、まず伝えたい感動を表現するために言葉を吟味し、選択する必要性を認識した。次に短歌を読んだ生徒は、作者の感動を理解しようと努め、深く言葉を分析することにつながった。また、鑑賞文を返すということで、読み手（短歌の作者）を意識し、相手の気持ちを考えながら明確な文章を書くという努力ができた。感想カードをもらった生徒は、自分の感動に共感してもらえる喜びや、自分の言葉が相手に思いもよらぬ想像をもたらすことの驚きを味わい、その気持ちを正確に文章で伝えようと努力した。このような言葉のやりとりを通し、生徒たちは伝え合うことの難しさを知りながらも、伝え合えうことができた時の達成感も得られた。この感動がさらに自分の作品を見直し、新たな伝え合いのスタートとなった。

２班では、「話す・聞く」力を高めることを目的に、ディベート形式の討論の指導を授業で行った。まず、ビデオを用いて、生徒にディベートについて理解させ、授業の目的を理解させた上で論題の設定を行った。ディベートの実践では、討論・審判・見学者という様々な役割を経験させることで、様々な立場から「話す・聞く」力を高められるよう工夫した。また、チーム内でもそれぞれ役割分担をし、全員がチーム内での話し合いに参加するよう指導したことで、生徒たちは討論に積極的に取り組むことができた。ディベートの授業を通して、生徒たちは明確な根拠を持ち、自分の立場を明らかにし、その上で相手を説得するために、分かりやすく、かつ効果的な話し方をしようと努力し、また相手の発言を正確にかつ批判的に聞く努力をした。このような活動を通し、生徒たちは、互いに相手の立場や考えを尊重しながら効果的に話し合いを進め、自分の考えを深めていくことができたと言える。

今後の課題としては次のようなことが挙げられる。

○「伝え合い」が個人対個人で終わらぬよう、広く全体に広がり、またそれが個人に戻っていくような指導法の工夫が必要である。

○継続的な学習活動により、生徒の言語感覚や語彙力をより豊かにし、文字言語においても音声言語においても、更に豊かな「伝え合い」ができるようにすることが必要である。

平成１３年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１３年度　第４１号

平成１４年１月２３日

編集・発行　東京都教職員研修センター
所在地　東京都目黒区目黒１－１－１４
電話番号　０３－５４３４－１９７６

印刷会社名　株式会社　ドゥ・アーバン